

論文の内容の要旨

論文題名 建築デザイン教育に学ぶ景観デザイン教育のありかた

氏 名 重山陽一郎

■研究の背景と意義

「景観デザイン（土木分野で主に「美」を対象としたデザイン）」は、まだまだ若い分野であり、景観デザインを担う人材は全く不足している。

また、大学の土木関連学科では設計に関する職能教育をほとんど行っていないため、卒業してもプランニングもデザインもできない。このような訓練は就職後の実務教育に任されてきたが、社会情勢が変化し、企業は新人を一から教育する余裕をなくしつつある。これからの大学の土木関連学科では、計画や設計の能力を育成し、就職直後からある程度の戦力となるようにしなければならない。

しかし、優れた景観デザインの専門家を育成する方法は未だ確立されておらず、そのレベルは他の領域よりも明らかに低い。本研究は、景観デザイン教育のありかたを明らかにすることによって、短期的には優れた景観デザインの担い手の育成を、長期的には優れた景観の創出を志すものである。

■研究の目的と方法

景観デザイン教育は、既に少数の大学において実行されている。これらの教育は、建築デザイン教育などを手本とし、大学教員や実務設計者との議論をふまえて

構築されている。その過程で、景観デザイン教育のありかたについては、経験的にだいたい分かっていることが既にいくつかある。本研究の目的は、この「だいたい分かっていること（初期案）」を検証し、改良を加えて新たな景観デザイン教育のあり方を提案することである。

検証の第1の方法は、建築デザイン教育に関する調査である。デザイン教育の点では、建築学は、土木工学よりもはるかに先輩であり、景観デザイン教育について考えるには、まず、建築デザイン教育について学ぶ必要がある。建築デザイン教育と、そこから育った人材、成果としての建築物などを調査・分析することにより、建築デザイン教育の特徴や課題を浮き彫りにし、翻って、従来の土木デザイン教育との比較を行うことにより、景観デザイン教育のあり方を検証する。第2の検証方法は、筆者が現在携わっている景観デザイン教育の経験に基づくものであり、初期案の改良を提案する。

■研究の枠組み

本研究の枠組みを、図1に示す。

本研究では、まず第1章「序章」で研究全体の背景や目的、研究の枠組みについて整理した。また、既往研究を概観し、景観デザイン教育について、既にだいたい分かっていることを整理し「景観デザイン教育の

ありかた：初期案」としてまとめた。

第2章「優れた建築家の学歴・職歴」、第3章「インタビューによる建築デザイン教育の調査」、第4章「教員とカリキュラムの大学間比較」、第5章「建築デザインの評価基準の特徴と課題」では、上記の「初期案」を検証するために、建築デザインと建築デザイン教育について調査を行い、それを参考にして、景観デザイン教育のいくつかの項目について検証や、改良への示唆を得た。また、第6章では、それまでの研究内容を「結論1：建築デザイン教育の特徴と課題」としてまとめた。

第7章「建築デザインと従来の土木デザイン、および景観デザインの評価基準の相違」では、建築デザイン教育から何を学び、何を改良すべきか明らかにするために、建築デザインと従来の土木デザイン、および景観デザインの評価基準の相違を把握した。これらに基づいて景観デザイン教育のいくつかの項目について検証や、改良への示唆を得た。

第8章では、これまでの検証や改良への示唆を受けて、「結論2：景観デザイン教育のあり方」を提案した。また、この提案は筆者によって既に実践されており、その内容は第9章「景観デザイン教育の実践」で報告した。

図1 研究の枠組み



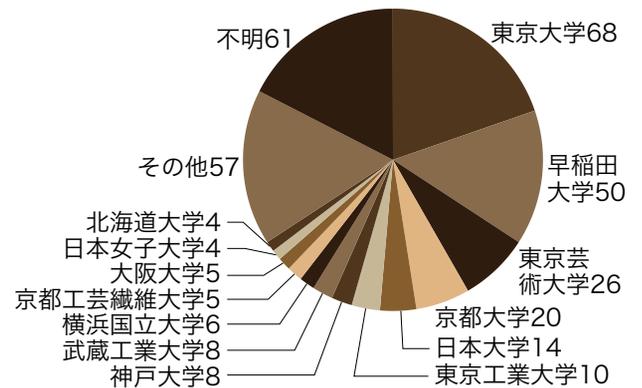
教育実践に基づいた評価と改良への示唆はフィードバックされ、第8章では、筆者の教育実践に基づいた提案も行った。

■結論：景観デザイン教育のあり方

□前提条件

優れた建築家の出身大学は、極めて少数の大学に偏在しており（図2）、職歴についても偏りがある。ある学歴・職歴のパターンに沿って修行することは、優れた建築家になるための必要条件に近く、これ以外の学歴・職歴では可能性がかなり低い。したがって、優れた建築家は建築家自身の努力や偶然だけで育成されるので

図2 優れた建築家の出身大学（単位：人）
調査対象は、建築賞受賞経歴を持つ建築家 346人



はなく、優れた建築家を育てる建築デザイン教育が確かに存在する。したがって、優れた景観デザインの専門家を育成する教育も存在し得ると考えられる。

□教育目標：どのような人材が必要なのか

建築デザイン教育の調査結果に基づき、景観デザイン教育が育成する人材が身につけるべき能力を提案した。また、筆者の教育実践の経験に基づき、それらの教育を行うべき時期や手段によって分類した（図3）。

□教育内容

建築デザイン教育の内容について、従来の土木デザイン教育との比較を行い、両者に共通の項目と建築デザイン教育独自の項目に分類したものが表1である。表の左側（建築独自の項目）は、インタビューにおいて建築家が師匠から学んだこととして力説する項目でありな

がら従来の土木デザイン教育では抜け落ちているため、景観デザイン教育ではこれらの項目も重視すべきであろう。また、筆者の教育実践の経験に基づき、教育目標として提案した能力毎に、具体的な教育内容を提案した。

□教育方法

建築デザイン教育の調査では、優れた建築家を多数輩出する大学では、設計演習に非常に長い時間を割いていることが明らかとなった（図4）。したがって、景観デザイン教育においても設計演習の充実が必要だと考えられる。しかし、その時間数の目安は判断が困難な問題である。というのは、建築の設計演習の時間数が、土木に比べてはるかに多く、容易にその差を詰めることができるとは考えられないからである。これは、土木

図3 景観デザイン教育が育成する人材が身につけるべき能力と、その教育時期や手段による分類
言うまでもないが、教育実践の場面では、図のように明確に分けることは出来ず、境界が曖昧となる。

(1)大学や職場での教育が可能な能力	(2)学生の適性や才能、運など、教育が比較的困難な能力
(1-1)デザイン力	(j) 人脈
(a) トータリティーを重視したデザイン能力	(k) 感性
(b) 維持管理や耐久性、用途変更への対応を重視したデザイン能力	(l) ものづくりの情熱と、それを持続するエネルギー
(c) 使いやすさと多機能性を重視したデザイン能力	
(d) デザイン的思考による意志決定能力	
(1-2)コミュニケーション力	
(e) 客観的な評価能力 と、主観的な主張能力	
(f) 広い視野を持ち、他者と協働できる能力	
(1-3)基礎的な力	
(g) 基礎的なスキル	
(h) 基礎的な知識	
(1-4)その他	
(i) 計画から竣工、さらに施設の利用や維持管理まで見通す能力	

凡例

- 大学でのデザイン教育で最も重視する能力
- 大学で学生の能力向上の機会を与えるべき能力
- 従来の大学教育で、ある程度身に付く能力
- 就職後の教育で身に付く能力

表1 建築デザイン教育と従来の土木デザイン教育の、教育内容の比較

建築デザイン教育に含まれるが従来の土木デザイン教育には、あまり含まれない項目	建築デザイン教育、従来の土木デザイン教育の両者に含まれる項目
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを持つことの重要性 ・建築史 ・建設の文化・芸術的側面 ・設計の思想、理論 ・形態の美しさ（プロポーション、構図、仕上げ、ディテール、納まりなど） ・場の読み方、コンテキスト、風土や歴史文化と意匠 ・プレゼンテーション能力 ・建設には直接関連しない文化的・教養的な内容 ・事務所の経営方法 	<ul style="list-style-type: none"> ・機能と形態、空間構成 ・都市計画、まちづくり ・構造、材料、施工 ・設備（光、音、熱など） ・積算 ・法規 ・仕事に対する姿勢、情熱 ・施主との対話の姿勢、折衝の仕方、設計料の交渉方法 ・共同設計者やメーカーなどとの話し方 ・段取りの立て方 ・意志決定の方法

工学の扱う施設の範囲が非常に広いため、やむを得ない面がある。優れた景観デザイン教育を行うためには、設計演習の時間数を増やすことが望ましいが、その時間数は建築との比較で判断できるものではなく、土木関連学科の教育内容や教育方法を全体的に見直し、そこでの議論に基づいて判断するものであろう。

筆者の教育実践に基けば、設計演習は学部で135時間、大学院で56時間程度が望ましいと提案した。

□教員

建築デザイン教育においては、プロフェッサーアーキテクトが決定的に重要性であることが明らかとなった。優れた建築家を多数輩出する大学では、数多くの優れた建築家が大学教育者を兼務している(図5)。したがって、景観デザイン教育においてもプロフェッサーアーキテクト(実務経験者)の存在が重要であることは明らかである。土木分野では設計の実務者が大学教員を兼ねる例は極めて少ないが、今後はそれを増やすことが必要である。

筆者の教育実践に基づく提案としては、大学の土木関連学科では、最低4人の実務経験者が必要だと提案

図4 建築計画・意匠関連の設計演習の時間数の比較
*学部4年間の合計 *卒業設計は含まない

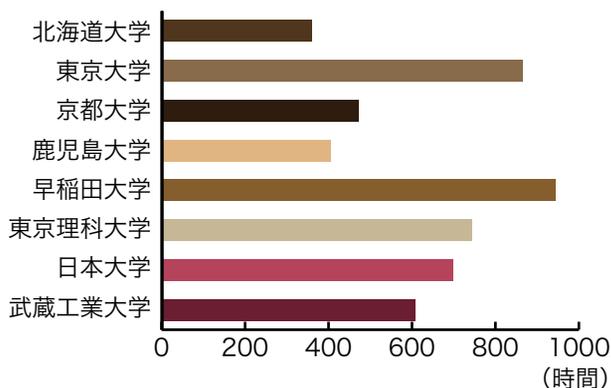
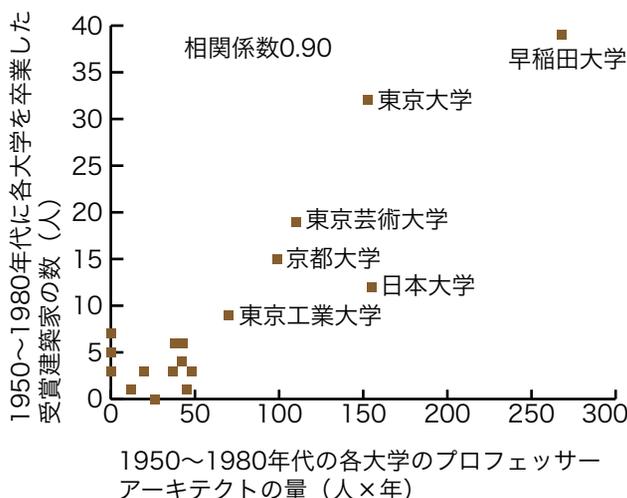


図5 1950～1980年代の大学別プロフェッサーアーキテクトの量と、同時期に学んだ受賞建築家の人数の相関



した。4人とは、プランニング、意匠設計、構造設計、施工の実務経験者である。

□学生

既往研究によれば、優れた建築家となる可能性の高い学生は、絵画、彫刻などの芸術的センスと、理数系の興味と力量を併せ持っている学生である。また、本研究では、優れた建築家の多くが高校の成績も優秀であることが明らかとなった。景観デザイン教育に求められる学生像も同様だと考えられ、このような学生を招くためには、入学試験にデッサンなどの実技を取り入れることも考えられる。しかし、残念ながらほとんどの土木関連学科は、現状では志願者が少ないため学生を選び好みできる状態ではない。今後はまず、若者に土木工学の魅力を伝えるところからスタートしなければならない。

□教育環境・設備、ほか

前述のように、建築デザイン教育にとって設計演習は非常に重要である。本研究では、教育設備に関する調査は行っていないが、どこの大学でも建築学科には設計演習室があり、学生の創作活動の拠点となっている。一方、土木関連学科では設計演習室が十分に備えられていることは少ない。

景観デザインでは、建築デザインよりも広いスケールをデザインの対象とする場合が多いため、巨大な模型を作成する必要があるが出てくる。このようなスペースの確保は難しい問題ではあるが、それなしでは景観デザイン教育が非常に困難となることも確かである。

筆者の教育実践に基けば、低学年では設計演習の敷地を小規模に押さえることにより、学生は自宅での図面や模型の製作が可能であり、高学年で履修者が絞られた後に、1人1台のテーブルを用意した設計演習室を用意することが望ましいと提案した。また、ワークステーション室や、優れた事例のデータベースの重要性なども指摘した。